

冬の朝ホームに並ぶしかめ面

県立尾道北高等学校二年 柴田 翔

井戸の中大きな西瓜が冷えている

呉市立横路中学校三年 山口 拓真

運動会カメラも走る徒競争

尾道市立栗原小学校五年 梶原 瑞起

ドングリを拾ってみたら秋の気配

福山市立道上小学校五年 和田健太郎

ビー玉の中ははるかな夏の海

盈進中学校一年 香西 輝

小学校最後の騎馬戦天高し

世羅町立せらにし小学校六年 久保 圭佑

あさがおに負けてしまった朝ねぼう

尾道市立吉和小学校三年 渡邊 梨緒

日本海いとことどうじとびこんだ

府中町立府中央小学校五年 下潮 美友

くわがたにはさまれたいほくのゆび

三次市立川地小学校二年 安成 絃二

Tシャツのそでをまくって日焼けあと

福山市立東中学校二年 占部 裕美

## 一般の部

入賞作品

広島県知事賞

看取り夜のやさしくなれず髪洗ふ

福山市 林 すみ

広島県議会議長賞

風鈴を外し隣家の喪に侍る

広島市 山風 徹

広島県教育委員会賞

囀さえずりの芯に原爆ドームかな

呉市 加藤 浩

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

亡き母の着物でつくる夏帽子

安芸郡府中町 石橋 康徳

広島市長賞

邯鄲<sup>かんたん</sup>や寺領の隅に一揆の碑

福山市 津田 重子

広島市議会議長賞

流灯の乗る海神のてのひらに

福山市 早間 幸枝

広島市教育委員会賞

鍬の柄に乾く軍手や赤とんぼ

広島市 北川貴和子

財団法人ひろしま文化振興財団会長賞

梅雨空に放蝶の網今開く

福山市 富田 幸枝

選 木村 里風子

特  
選

街の灯に距離おくくらし星月夜

福山市 小林 信子

【評】星月夜、星の輝く明るさと街の灯と、距離を置くことは、街からの逃避にも似た老後の安住の地か。

草茂る廃車に褪せしマスコット

廿日市市 平井 禮子

【評】マスコットが哀れ。充分に乗った拳句、捨てられた自動車の窓から見えるが雑草に捨てる持主の心も哀れ。

風鈴を外し隣家の喪に侍る<sup>はべ</sup>

広島市 山風 徹

【評】隣りに不幸があった、風鈴を外し静かにしてあげようという心遣い。親しかったのであろうか、喪に侍るに感心。

亡き母の着物でつくる夏帽子

安芸郡府中町 石橋 康徳

【評】いつまでも残しておいた母の着物を身近かにするため帽子にした。これで母と一緒に歩く。

鍬の柄に乾く軍手や赤とんぼ

広島市 北川貴和子

【評】庭先に立てかけた鍬の柄に軍手が干してある。鍬の先に赤とんぼがとまった。晴れた日の農家の寸描である。

入選

盆仕度軋きしむ畳に風通し

東広島市 出雲 裕子

子の遺影冷水で拭く広島忌

広島市 三澤 豊

巢をこぼれさうに育ちし燕の子

福山市 内田 千年

蔵の扉の重き錠前ちちろ鳴く

呉市 宮原 高子

雨戸鎖す軒風鈴の遺品かな

広島市 島津紀代子

暮れなずむ波にたゆたふ残り鴨

広島市 正山 史明

囀さえずりの芯に原爆ドームかな

呉市 加藤 浩

漫画本見せに来る子や夏の果

広島市 下田 良

牡蠣棚へ舟を着けをり雲の峰

広島市 浜井 育子

磯垣に老婆諸蔓干しており

安芸郡府中町 田坂 経子

看取り夜のやさしくなれず髪洗ふ

福山市 林 すみ

終はりなき農の仕事や蟻の道

神石郡神石高原町 村田 順子

耳遠くなりたる夫と豆の飯

広島市 石井三和子

邯鄲かんたんや寺領の隅に一揆の碑

福山市 津田 重子

被爆樹で作りし笛や文化の日

広島市 星川奈美枝

少年の草笛にある恋ごころ

庄原市 山崎 靖子

田おこしの合間にメールうつ農夫

安芸郡熊野町 尾下五百子

八朔はっさくの鬘たてがみ粗き飾り馬

福山市 志田 寿江

犬好きも吠えられてゐる島薄暑

広島市 森本 弘子

選 竹下 陶子

特 選

梅雨空に放蝶の網今開く

福山市 富田 幸枝

【評】 国蝶とされる大紫の蛹から羽化までの保護の一端で、愈々囲いの大網を開き自然の中へ放つ感激の一シーン。

初蟬の風の隙間を鳴きにけり

三原市 成末知歌子

【評】 初蟬の声が風の間に間に聞えてくる。地上に羽化したばかりの声に、生物の命の躍動を感じる。

天の川とどかざる文書きもして

福山市 桑田みづほ

【評】 届かぬ文とは、亡き友か、肉親宛であろう。切ない心を綴り、封をした手紙を手にする心情が伝わる。



看取り夜のやさしくなれず髪洗ふ

福山市 林 すみ

【評】病人の態度に、優しく接する事が出来ない心を悔いながらゆつくり洗う髪に固い心を解こうとする心情に惹かれる。

流灯の乗る海神のてのひらに

福山市 早間 幸枝

【評】多くの流灯が沖へ向っている。わたつみの神がてのひらに乗せて、十億土の彼方へ送って下さる。詩的発想。

入  
選

太鼓打つ少年の汗少女拭く

広島市 出口 政春

父の日や息吹きかけて拭く遺品

広島市 山口ひろ女

袱紗ふくさ解くごとむらさきの花菖蒲

福山市 佐藤 静枝

風鈴の音も平和の風と聞く

安芸郡府中町 藤山 道子

スタンドの人文字ゆらぐ夏帽子

福山市 佐藤 浩子

過去帳の御霊みたま重たき原爆忌

福山市 山口つねみ

燕の子帰る比島の野を知らず

福山市 永井 啓三

風鈴を外し隣家の喪はべに侍る

広島市 山風 徹

巢をこぼれさうに育ちし燕の子

福山市 内田 千年

名月や波のゆらめく能舞台

広島市 加藤 伸江

一人づつ一つづつ墓洗ひけり

福山市 広川 良子

練兵場ありしは昔薔薇薫る

福山市 高田 富美

かがり火に室町しのぶ薪能たきぎのう

福山市 戸原 澄清

八十路過ぎ今も語り部原爆忌

広島市 水戸 梅村

亡き母の着物でつくる夏帽子

安芸郡府中町 石橋 康徳

花托かたてふ日の揺籃や蓮は実みに

福山市 杉原 芳子

田草取る今年限りと懇ろに

安芸高田市 三浦 範男

還らざる動員学徒原爆忌

福山市 渡辺 其女

耳遠くなりたる夫と豆の飯

広島市 石井三和子

八朔はつぎの木馬に鞆の津の栄枯

福山市 森田 燕史

選 和田 照海

特 選

邯鄲<sup>かんたん</sup>や寺領の隅に一揆の碑

福山市 津田 重子

【評】一揆に対する弾圧は凄まじく残酷であった。その石碑が寺領の一角にある。切字のきいた佳句。

看取り夜のやさしくなれず髪洗ふ

福山市 林 すみ

【評】看取りは病者に思いやりの心が大事。その言動の端ばしに恥じるものがあつた。感情の起伏の微妙な心を詠む。

防人の船泊りとや夜光虫

福山市 水川 博晶

【評】九州へ防人として赴く途次潮待ち泊りをする。故郷へ残した父母や妻子への思慕が募る。夜光虫が一層増幅させる。

カーテンで仕切る病室昭和の日

東広島市 岡村みきえ

【評】カーテンだけの間仕切の病室。それぞれの病者の息づかいが聞こえそうだ。異質な季語のあしらいがよい。

囀なぐさずりの芯に原爆ドームかな

呉市 加藤 浩

【評】夏の蝉に比べ春の小鳥の囀は、明るさとやさしさが感じられる。原爆ドームを囲む声に安らかさを感じる。

入選

ぼうたんや乳房のまろき志功の絵

福山市 北村 梢

古里の変はらぬものに天の川

福山市 伊東 建二

八朔はつさくの鬘たてがみ粗き飾り馬

福山市 志田 寿江

緋目高のどつと蠢めく夜明けかな

福山市 馬屋原紅葉

女郎蜘蛛月の鬼門へ一糸張る

庄原市 稲垣サカエ

太鼓打つ少年の汗少女拭く

広島市 出口 政春

初糶せりや店の算盤五つ玉

安芸高田市 沖田喜美子

露の身の癒ゆることなき妻看取る

福山市 山本 義郎

清水湧く砂の笑窪を震はせて

広島市 安江 利子

吾わがが狭庭さなわ訪ふ秋蝶も一過客

福山市 谷本 宮子

寒紅や遊女寄進の石燈籠

広島市 梶原美江子

一本の花芒<sup>すすき</sup>挿すケルンかな

廿日市市 斎藤 金二

雷鳴に一村の杉ねじれけり

広島市 中村美恵子

吊り橋のぐらりと秋の空うごく

広島市 若本 鴻遊

帰農して父在りしごと年守る

三次市 高田 馴三

盆の客田水あるかと尋ねけり

東広島市 小玉満寿子

田草取る今年限りと懇ろに

安芸高田市 三浦 範男

金鈴をひとつ転がす虫のあり

福山市 嶋山 洋子

被爆樹の来し方行方つくつくし

廿日市市 矢野 智司

大胆に咲き大胆に散る牡丹

福山市 佐藤 昭代





# 現代詩

選  
者

橋 目 松  
本 次 尾  
果 ゆき 静  
枝 こ 明

# 小・中・高校生の部

入賞作品

広島県知事賞

命

セミの鳴く声がする  
毎日毎日、昼でも夜でも  
うるさいなあ  
僕は思い出す  
この声は求愛の声  
二週間という短い  
命のタイムリミットの中の  
子孫を残す  
最後のチャンス  
僕は一匹の  
セミになつて考えた  
子供の長い年月をすごし  
大人の短い時間を

坂町立横浜小学校六年 中島 康貴

子供を残すためだけに鳴いて  
きちょうな二週間を終わる  
これほどまで

つまらない人生はない  
僕は思う

セミ達は分かっているのだろうか

明日死ぬかもしれない

命の短さを

分かっているのだろうか

短い人生すべてを

産まれないかもしれない

子供にたくしている事を

僕はそんな人生

絶対にいやだ

僕は思う

うるさいなあ

でもセミにとって

それは何年も生きている

楽しい時間かもしれない

セミにとって僕は

つまらなそうに見えているかもしれない

そんなセミ達に僕は思う

今、楽しい？  
それに答えるかのように鳴く  
たくさんのセミ達

現 代 詩 部 門

広島県議会議長賞

なぜ

坂町立横浜小学校四年 平林 愛菜

なぜ、人は働く

なぜ、人は死ぬ

なぜ、人は生まれる

なぜ、人はわかち合える

なぜ、人はつらい事でも、…それを乗り越えられる

なぜ、動物は、かわれ、さい後まで、やさしく

くしてもらえれば、幸せなの

なぜ、人は動物をすてる

すてられる動物は、すてられる

拾われるのくり返しをつづける

動物は、すてられる事がこわい

人は、死ぬ事がこわい

人も、動物も、ほとんど、同じ事がこわいの  
かもしれない  
それを、この世から、どうやったら消せる

広島県教育委員会賞

さんさんと太陽が輝く日

世羅町立せらにし小学校六年 末里 亜莉沙

祖母に頼んでたんすから出してもらった、半袖の洋服

八カ月ぶりに見る夏服

衣装ケースを開けると

鮮やかな色とりどりの洋服

まるで南国の花や鳥や海のように

これは去年買ってもらった、チェックのワンピース

これは「ユニクロ」でお母さんにねだって買ってもらったTシャツ

ピンク、紺、緑のTシャツ

どうしてだろう

見慣れているはずなのに  
わくわくする



どきどきする  
胸が高鳴る

あつこれはアイスを落とした時のシミ  
こっちはスパゲティのシミ  
そういえばこの汚れは田植えの泥

一枚一枚の服から鮮明な夏の記憶がよみがえ  
る

きらきらした瞳で覚えた感動

あの時にかいた汗

私を包んでいた風が再び吹く

その時の思い出を洋服は全部知っている

そして今年の夏にも思い出は作られる

思い出はこの洋服に更に刻まれる

それは私の歴史になる

夏服よ

私の成長を刻んでおくれ

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

## 花の教え

県立祇園北高等学校二年 養田 早紀

ある日のこと

コンクリートのひび割れに

小さな小さな芽が出ていた

誰も見向きしない芽は

一生懸命に背のびしていた

それを見ると自然に笑みがこぼれた

その姿がともけなげに見えたから

けれど同時に疑問が生まれた

なぜ一生懸命なの？

誰も見ないかもしれないのに：

すると、そつと答えた

—— 私が私らしく生きるためですよ

コンクリートのひび割れに

小さな小さな芽は花を咲かせていた

小さく白く、名もないような花は

ただただ笑っていた

それにつられ、自分も笑っていた

それと同時に疑問が浮かんだ

私はこの花のように生きている？

この花のように

誰も見ていないところでも

けなげに一生懸命に、私らしく生きている？

その問いに花は答えない、何も言わない

それに耐えられなくて

私は花から目をそらした

しばらくして

小さく白く名もない花は枯れていた

けれど穏やかだった

私はあの時、なぜ目をそらしてしまったのか

なぜ花の言いたいことがわからなかったのか

その答えを出すのは自分なのだ

だから花は答えずにただ黙っていた

いつだって生き方について答えを出すのは

他ならぬ自分自身なのだ

花はそれを教えてくれた

だから生きよう

けなげに、一生懸命に、自分らしく

これからの長い人生を歩んでいこう

現 代 詩 部 門

## 広島市長賞

### じぶんのちからでがんばっている

世羅町立東小学校一年 多留見 明里

はじめてのすいえい。

かおつけができない。

こわくて、ないた。

あしが、ガタガタ、ガタガタふるえた。

おとうさんとおふろでれんしゅうだ。

おふろのそこに手をついて、

うーん、ばあ。

「あかりちゃん、ぶくぶくしないと、

すぐにいきがすえないよ。」

おとうさんにおしえてもらったように、

ぶくぶくばあ。

でも、わたしは、

ばあのと、すぐにかおをふいてしまう。

だから、すぐにかおがつけられない。

たいいくのじかん、

せんせいが手をもってくれた。

およぎやすいな。

おとうさんがおしえてくれたように、  
みずのなかで、

ぶくぶく、いきをだして、

ばあと、せんせいの目をみた。  
でも、また、かおをふいた。

きのうのたいいく。

びいとばんをもって、

ぶくぶく、ばあのれんしゅうをした。  
ぶうるのよこを、

かおをふかずにいけるようになった。

ときどき、せんせいがあたまをおす。

「じぶんでいれるから、おさないでください。」  
と、

ちようせんしてみる。

ぶくぶく、ばあ。

すぐにあたまをいれて、

ぶくぶく、ばあ。

わたしは、いま、

じぶんのちからでがんばっている。

広島市議会議長賞

知りたい

呉市立横路中学校三年 中山 祐華

私は ひろしまの子  
昭和を知らない 平成の子  
だから 教えてもらうしかない  
気付くことも ある  
けれど 分からない事の方が多い

私は ひろしまの子  
ここは  
きれいな場所 美しい場所  
きつと たくさんある  
今まで 行った所もある 見た所もある  
けれど 知らない所の方が多い

私は ひろしまの子  
ここは



初めて 原爆の落とされた所  
戦争という ひどい世界の  
残ってしまった 傷  
今まで たくさん たくさん  
聞いた 見た 行った  
だけど 知らないことの方が多い

私は ひろしまの子  
平成に 生まれて  
未来を作っていける  
けれど  
今までのことは 教えてもらうしかない  
そして  
そのことを未来につなげないと  
いけない  
でも  
私に 教えることができるだろうか  
すごく すごく 不安  
だから 知りたい  
今よりも もっと たくさん

広島市教育委員会賞

おじいちゃんそだてたあさがお

広島大学附属小学校一年 川上 日向子

がっこうでうえたあさがおは、  
まだまだ

まいあささいています。

けさは六こもさきました。

せんしゅうは

十五さいた日もあります。

わたしは

あさとよるに

「げんきにさいてね。」

みずをあげています。

あさがおは、

あお、むらさき、あかむらさき、

いろいろな いろでした。

たねのなかに、きれいないろを

とじこめていて、

きれいなはなを、

いっぱい いっぱい  
さかせるぞ。

だって、だって、  
いんのしまのおじいちゃんが  
ながいしちゆうをたくさんたてたから、  
あさがおさんがよろこんで  
つるが ぐんぐん ぐんぐんのびて  
三メートルにもなりました。  
ひりょうもあげたら、  
あさがおさんは よろこんで  
ひゃっこぐらい  
さきました。  
そだてるひみつを  
おじいちゃんが、  
ひなこにおしえてくれたもの。  
だから、  
だいじょうぶ。  
たねさん、あんしんしてね。

財団法人ひろしま文化振興財団会長賞

The <sup>ザ</sup> War <sup>ワー</sup>  
(戦 <sup>いくさ</sup>)

県立可部高等学校定時制一年 佐藤 旭

消えない記憶が今も頭の中で  
叫びのように 音を鳴らし続けている  
私がこの世から消えても  
世界は変わらない  
そう嘆く君の心は悲しみに濡れている  
私がこの世から消えても誰も悲しまない  
そう嘆いて消えた 僕の世界から…

毎朝目覚めるたびに 悪夢が始まるような  
現実から逃げ出したくても  
鎖のように纏わりついて…  
眠りのない夜の街 影を落とす真昼の空  
いつまで続くのか…  
誰も気付いてはいないのか…?  
世界がもし平和なら  
きつと誰も嘆きはしないだろう  
無意味に流れていく血は怒りと悲しみに

今日笑顔だった子どもたちが  
明日悲しみに触れていても  
世界は何もしてはくれない  
戦場に向かう兵士たちは皆  
何を思っているのだろうか  
手にした凶器で 狂気に駆られるのか：  
戦場で倒れた君は  
何を思ってたのだろうか  
家族もいない君は  
愛を知って逝けただろうか  
それを知る術はもうない：  
たとえ争いが終わっても  
人々は醜く嫉み合うだろう  
鏡には映らない 恐ろしいほどの狂気で  
無垢な子どもたちの笑顔でさえ  
いつかは狂ってしまうだろう  
それを止める術はもうない：  
いつか子どもたちが  
狂気に蝕まれることになっても  
僅かな幸福を覚えてほしい

今は居ない君が  
最期に遺した言葉は  
今も僕が受け継いでいるよ…

現 代 詩 部 門

## 夜明け前

県立賀茂高等学校一年 名井 章

散らかった机

出っぱなしの服

片付けていない姿見に

情けない自分が映る

自分の居場所を探すように

何かしたいことを探すように

部屋を歩きまわって

本を開く

音楽を聞く

何度も読んだ話に

何度も聞いた音楽に

今日の私は心が揺れた



どうして心が痛いのか  
どうして涙が溢れるのか  
何がしたくて  
何処へ行きたいのか

分からなくて  
分からなくて

誰かの声を待ってみたりする

夜が明ける時に  
私は誰の手を握っているのだろう

## 朝一番

広島大学附属小学校四年 栗田 優輝

キユツ

蛇口を開ける

花たちが いっせいに振り向く

ホースをふるわせ水がかけてくる

ジュッパ―

無数の穴からはじき出る銀色の水

うなだれた葉が 指先をのばす

ザザザザ ザザザザ

カラカラのかわいた水音が 庭に響く

水玉たちが葉っぱの上を転がり流れる

みるみるうちに あざやかな緑色をとりもどす

一粒の水もこぼさぬように

葉ですくい取り 茎につたわせ

根元に流しこむ

こむ

根元のこけが ふくりふくらむ

白けた砂が こげ茶の土にもどっていく

ぼくに葉をしならせ

水しぶきを返す

とつても気持ちいい

植木ばちの底から水が流れ出し

庭に川をつくる

ジャバ ジャバ ジャバツと

うるおった水音が庭に響く

キュッ

蛇口を閉じる

ポタンポタンしづくが落ちる

のどをうるおした花たちは

背すじをのばして

朝陽を待つ

## 四つ葉のクローバー

広島市立庚午中学校二年 安藤 真奈美

ヨツバ 四つ葉  
それは見つけると幸せな事がおきる雑草

ヨツバ 四つ葉  
人間の感情なんだよ  
素直な気持ち 心から喜んだり  
すごく すごく悲しくなったり怒ったり  
歯をくいしばって悔しんだり  
感情がたくさん詰まって  
集まって出来た形だよ 色だよ  
模様がちよこつとついててね  
かわいらしいんだよ

ヨツバ 四つ葉  
奇数の三つ葉より仲良し  
枚数がふえるほど感情も豊かに 豊かに

広がっていく

四つ葉のクローバー 見つけた

## うちの二ひきの子ねこ

世羅町立東小学校三年 内海 佑希

「あぶない。」

おばあちゃんの運転する車で、

お買い物に行こうと、

家を出ようとしていた時、

タイヤの横に、一ひきの子ねこが見えた。

ひかれると思ったしゅん間、

母さんねこが、子ねこの首をかんで、

「こつちへ来なさい。」

と言うように引っぱった。

子ねこは体を小さく丸めて、動かない。

助かったんだ。

わたしの体から力がぬけた。

おばあちゃんと顔を見合わせた。

七月に、うちで二ひきの子ねこが生まれた。

母さんねこは灰色で、二ひきの子ねこも灰色。

目はこげ茶色で、ふたごみたいにそっくり。

目やにがついた子ねこは、よってくるけれど、もう一ぴきは、近づくとにげる。

おくびょうなのかな。

いつも、母さんねこの後ろをついて歩く。

生まれてすぐの時は、牛小屋にやってきて、

お父さんが茶わんに入れた牛にゆうを、

二ひきそろって、ぺろぺろなめていた。

今は、少し大きくなったので、パンも食べる。

子ねこのめんどろを見るのは、母さんねこ。

父さんねこは、ほし草の上で昼ねばかり。

うちの家族とは、まるでちがう。

母さんねこは、

「子どものめんどろを時には見て下さい。」  
と言わないのかな。

二ひきの子ねこは、かくれんぼが上手。

すき間があると、体を細くして入ってしまう。

わたしは、まだ子ねこをだっこしていない。

前に足をねこのつめでひっかかれてから、

ずっと、こわいのだ。

うちで生まれた二ひきの子ねこだから、

いつか勇気をだして、だっこしてみたいな。

弟と相だんして、名前もつけてやりたいな。

## おとうと のぞくん

世羅町立東小学校一年 矢崎 壮良

「ただいま。」

ぼくが、がっこうからかえると、

おとうとののぞくんが、たったたつときで、

ぼくのまえで、ちゃんこする。

そして、ぼくをじつとみる。

のぞくんは、一さいはん。

ぼくが、のぞくんのあたまを、

やわらかくたたくと、

こんどは、じぶんであたまをたたいて、

ぼくにけんかをうってくる。

ぼくは、けんかをかう。

うでとあしをかまれた。

ぼくも、かみのけをひっぱる。

のぞくんがなきだした。

おかしをあげると、すぐになきやむ。

ぼくもいつしよに、おかしをたべた。



おりがみをおっていると、  
のぞくんのは、ぐちゃぐちゃ。

「いけんよ。」

といって、つぎは、ひこうきをおってやる。

でも、またぐちゃぐちゃにする。

もう一ど、なおしてやる。

またぐちゃぐちゃ。

ちがうおりがみで、つるをつくった。

のぞくんは、おじいちゃんのところ、

しらんかおして、

いってしまった。

あかちゃんだから、しかたないや。

でも、おとこどうし。

のぞくんもさつかあくらぶにはいって、

いっしょにさつかあをしようね。

のぞくん。

## あさがおのたね

広島大学附属小学校一年 檜垣 雄介

ランドセルをせおって、  
「いってきます。」  
と、そとにでた。

あさのひかりのなかで、  
ふっくらとしたみどりのみをみつけた。  
まだ、はながたくさんあるなかに、  
ふっくらとしたみどりのみをみつけた。

みどりのみが、ちやいろくなると、  
たねができる。

たくさんのはな  
たくさんのみ  
たくさんのたね  
たねをまたうえて、  
どんどん どんどん